

浅草教会創立150周年を迎えるにあたって、私自身はもう一つの150周年といつも一緒に考えています。それは、30年間勤務したお茶の水女子大学（東京女子高等師範学校）の創立（明治8年11月、1875年）、およびその1年後のお茶の水女子大学附属幼稚園の創立（明治9年11月、1876年）です。（4年間園長を務めました）。創立の場所は現在の東京医科歯科大のある御茶ノ水のあたりでした。関東大震災で被災して、現在は文京区大塚にあります。考えてみると、御茶ノ水と浅草橋はごく近くにあります。その両方にご縁があるのも不思議なことだと思います。

附属幼稚園は官立であったために、国家の事業として唱歌集が作成されました。最初に作られたのは『保育唱歌』というもので、墨字で書かれ、宮内省に属する雅楽の伶人たちによる、雅楽の理論に基づいた曲でした。伶人たちはすでに洋楽を学んでいましたが、日本の伝統音楽のやり方で唱歌を作曲しました。その後、外国人教師が来たことで、西洋音楽に基づいた唱歌集が作られるようになります。

当時の浅草教会をはじめとするカトリック教会ではどのような聖歌が歌われていたのでしょうか。イエズス会士のエヴァルト・ヘンゼラー師が明治期のカトリック聖歌についての大きな研究を残しておられます。ヘンゼラー師は1993年にボン大学で日本のカトリック教会に関する博士論文を提出し、翌年出版しています。エリザベト音楽大学教授として2008年には著書『明治期カトリック聖歌集』にそのご研究をまとめて出版されています。

同書には明治期のカトリック教会における音楽の記述がまとめられています。そのなかに浅草教会の記述があります。1889年3月25日に、浅草教会の献堂式において、日本軍楽隊が演奏し、関口教会孤児院の子どもが4声の合唱曲を歌ったこと、1894年5月8日に、黙

想会でルマレシャル編『聖詠』の聖歌が歌われたこと、です。具体的な音楽はわかりませんが、前者の記録では浅草教会がかなりの規模の重要な教会であったことが推察できます。また、後者からは『聖詠』という聖歌集があったことがわかります。

ヘンゼラー師によれば、「カトリック教会の日本語聖歌の歴史をたどると、明治期はフランス、大正・昭和初期はドイツの影響が色濃く現われている」とのことです。ちなみに、聖霊降臨の5月28日のミサで、閉祭の歌で歌った『カトリック聖歌集』226番「きたりませ」はフランスの聖歌から明治期に取り入れられていることが、記されています。また、同書には言及されていませんが、入祭に歌った223番「みたまよ来たりて」はグレゴリオ聖歌に由来し、ドイツではバッハもこの旋律を用いたオルガン曲を書いています。本日、ケルン大聖堂でのミサでも入祭の歌はこの曲でした。

『カトリック聖歌集』に収められている聖歌は、フランスやドイツで長年歌われてきた聖歌に日本語を付けたものです。私たちが歌うこれらの聖歌は、たしかに『典礼聖歌』のように、日本で作曲されたものではありませんが、私たちがフランスやドイツなどのカトリック教会と音楽でつながっていることに思いを馳せてもよいのではないかと思います。

浅草教会が150年の歴史をもっていることは、言い換えれば、「聖歌を歌う」歴史を150年の間担ってきたことに他なりません。音楽の記述はほとんど残りませんが、日本におけるカトリック教会の音楽の歴史を解明するために貢献できれば、大変ありがたいことと思います。

【参考文献】

エヴァルト・ヘンゼラー；安足磨由美 2008 『明治期カトリック聖歌集』、東京：教文館。